報告

歴認研台湾現地調査報告

西岡　力（歴認研台湾調査団団長）
高橋 史朗（同副団長）
島田 洋一（同団員）

はじめに

歴史認識研究会は、平成31年3月、約１週間にわたって台湾調査を行った。目的は大きく三つあった。

一つは台湾におけるいわゆる歴史認識問題、特に慰安婦問題について調査することだ。平成28年12月、台北市に「阿嬤の家　平和と女性人権館」と呼ばれる慰安婦博物館が開館した。そして平成30年8月、台南市に慰安婦像が設置された。台湾は親日的といわれている。ところがそうでない動きがあった。今回の調査では、台北で慰安婦博物館を、台南で慰安婦像を調査し、それに関する様々な関係者の話を聞くことができた。特に、前者では慰安婦が二万円以上の預金を持っていたことを示す預金通帳を発見できた。後者では、良識的な台湾の知識人が、慰安婦像設置に反対するコラムを新聞に発表していたことを知った。それらは日本ではほとんど知られていない発見で、今回の調査の成果といえる。

二つめの目的は、ユネスコの「世界の記憶」（世界記憶遺産）に登録申請されている台湾人慰安婦関係資料を確認することだった。登録を目指しているグループには、日本や韓国、中国だけでなく、台湾の民間団体も加わっていて、具体的に資料を申請していた。その中身を調べることも調査の目的だった。今回の調査で、登録申請されている元慰安婦の絵と証言集を入手、確認できた。これも成果といえる。

三つ目は、台湾固有の歴史認識問題について調査することだ。台湾にはもともと本省人、台湾人が住み、そこへ国共内戦に敗れた国民党軍が外省人としてやってきて、戒厳令、軍事統治を敷いた歴史があった。そこで教えられていたのは国民党中心の歴史で、李登輝政権以降、本来の台湾人意識をつくる動きが始まった。そのために台湾の歴史を教えるようになったが、そのプロセスで日本の統治時代を肯定的に評価する認識が、学校などでも教えられるようになった。本省人と外省人との間で、歴史認識の問題はどういう状況に置かれているか。それは令和2年1月に行われる台湾総統選挙に直結し、日本の安全保障にも関係する問題である。この点については多くの関係者から話を聞き、台北で2.28記念館、国立人権博物館を見学することができた。

台湾では外省人による本省人の弾圧を白色テロと呼んでいるが、平成30年、白色テロに関する国立人権博物館ができた。本省人を虐殺した二・二八事件の記念館はあったが、それ以降の国民党による人権侵害を国立の博物館として展示している。そうした歴

史の負の部分についても、公の場で正面から実証的に光を当てようという動きが出てきた。だが、同博物館の研究員には国民党時代からの公務員が横滑りで入っていると聞いた。次の総統選挙の結果次第で、展示も変わるかもしれないと危惧する民進党系の人もいた。まさに台湾では歴史認識が政治と直結している。この三つめの課題については、今後も本研究会として継続して調査を続けるが、本報告ではこれ以上取り上げない。

日程の概要と参加者は以下の通りだ。

歴史認識問題研究会台湾調査

参加者：　団長西岡力、副団長高橋史朗、勝岡寛次、島田洋一、長谷亮介。なお、現地で梅原克彦氏（中信金融管理学院（CTBC BUSINESS SCHOOL）教授）が日程調整と案内をして下さった。

3月25日（月）
台湾桃園国際空港着
日本台湾交流協会台北事務所を訪問し、沼田幹夫代表らと懇談
片倉佳史氏（フリージャーナリスト、写真家）らと夕食懇談。

3月26日（火）
婦女救援基金会（阿マの家を運営）
阿マの家 平和と女性人権館
2.28記念館
国立人権博物館
黄天麟先生・台日文化経済協会名誉総長（元・総統府国策顧問）と夕食会。

3月27日（水）
国軍歴史文物館
忠烈祠
故宮博物館
国立原住民博物館
羅福全先生・台湾安保協会名誉理事長（元台湾駐日代表）らと懇談。

3月28日（木）
烏山頭ダム、八田興一紀念館、八田興一技師銅像、旧官舎等を視察。
南市の鎮安堂飛虎将軍廟
台南在住日本人専門家らと夕食懇談

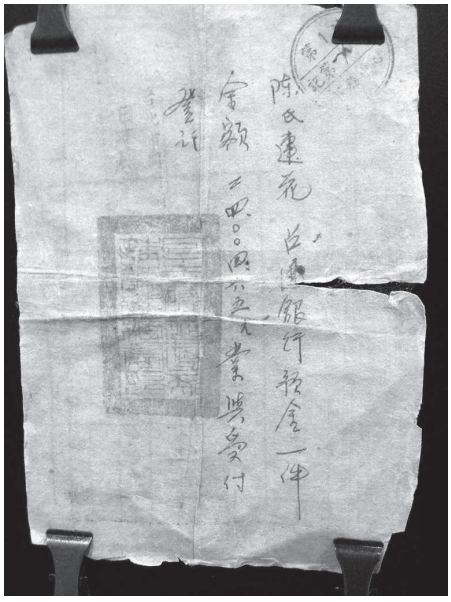
3月29日（金）
台南市台日友好交流協会訪問、郭貞慧・同協会理事長との懇談
赤カン樓（オランダ人、その後、鄭成功の拠点。羽鳥又男台南市長の胸像有り）
国立成功大学キャンパス視察、旧陸軍歩兵第二連隊跡地、昭和天皇が（大正12年、皇太子殿下当時）お手植えになったガジュマルの樹など
湯徳章記念公園、国立台湾文学館（旧台南政庁）、林百貨店（ならびに向い側の慰安婦像）、台南縣知事官邸、王育徳記念館

台南市台日文化交流協会スタッフと夕食懇談
3月30日（土）
帰国

１．元慰安婦の台湾銀行預金通帳発見

まず、台湾における歴史認識問題、特に慰安婦問題について報告したい。

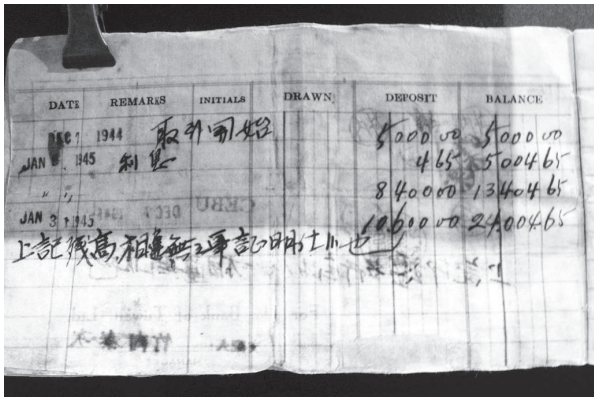
慰安婦問題で私たちはまず台北で「阿嬤の家　平和と女性人権館」と呼ばれる慰安婦博物館に行った。女性の人権に関するNGOの「婦女救援基金会」が平成28年12月に開館させた。「阿マ」は「おばあさん」という意味だ。同年3月の看板除幕式には、当時の馬英九総統が出席している。



そこで重大な発見をした。元慰安婦名義の預金通帳が展示されていたのだ。昭和20（1945）年1月現在の残高は、２万4004円65銭と記されていた。陳蓮花という元慰安婦の女性が持っていた台湾銀行の預金通帳だ。水に濡れた跡があるような形で複製されたもので、写真を見ていただきたいが、日付は1945年1月31日、残高に２万4004円65銭とあった。つまり終戦間際の昭和20年の1月に慰安婦の女性が２万４千円という巨額の預金を持っていたことが判明した。

博物館の英文説明は慰安婦をsex slave（性奴隷）と書いていたが、当時としては多額の預金をすることができたのだから、無報酬で働かされる奴隷でなかったことは明白だ。性奴隷という言葉は権力による強制連行の延長上で定義されるはずだが、奴隷という以上、対価などもらえるはずがない。ところが、通帳には２万4000円もの残高があった。

展示されていた預金通帳によれば、昭和19（1944）年12月7日に取引が開始され、まず5000円が入金された。昭和20（1945）年1月○日（インクがにじんで判読不能）に利息が４円65銭つき、同じ日に8400円が入金された。最後に同月31日に１万600円が入金され、残高が２万4004円65銭となっている。すぐ下に「上記残高相違無き事証明仕ル也」と書かれてある。



隣に展示されていた残高証明らしい書類には「陳氏連花 台湾銀行預金１件 二四、○○四. 六五円　業與（？）受付登記」とあり、銀行の印ら

しき物が押されている。ここから、この通帳が戦地の軍事貯金の通帳ではなく、一般銀行である台湾銀行のものであることが分かる。

台湾銀行の通帳に２万４千円が入金されていたということは、通帳の持ち主の陳連花氏が慰安婦として働いていた戦地から、故郷の台湾の銀行の自分の口座に送ったということだ。それがきちんと届いていたということになる。

韓国人元慰安婦の文玉珠さんは２万6145円の貯金をしていたことが、すでに明らかになっている（文玉珠口述、森川万智子構成『文玉珠 ビルマ戦線楯師団の「慰安婦」だった私』梨の木舎）。文さんはビルマの慰安所で働き、多額の軍事貯金をしたとして、日本政府を相手に貯金払い戻しを求める裁判を起こした。通帳を紛失していたが、訴えられた日本政府が調べたところ、戦後、軍事貯金を引き継いだ郵便貯金の記録から貯金額が判明した。

文さんの証言は論争となって、吉見義明氏をはじめとする左派の学者らは、２万6000円の通帳があったのは事実だが、当時戦地はインフレで価値がなかった、だから当時の慰安婦の暮らしが裕福だった、と考えるのは間違っているなどと主張している（吉見義明『日本軍「慰安婦」制度とは何か』岩波書店）。

しかし、文さんの前掲口述手記では、大邱にいる家族に5000円も送金した、大邱では千円あれば家一軒買えた、自分も休みの日に買い物に出かけ、ルビーや毛皮を買ったとも述べている。ビルマでも高価なものが買え、送金した金を兄が使っていて帰国後、喧嘩したともあって左派の学者の主張は明らかにおかしいと、西岡は反論してきた（西岡力『よく分かる慰安婦問題』草思社）。

今回の発見で、いよいよこの論争の結果は明らかになった。台湾人慰安婦の中にも、２万円以上も預金できる人がいたということだ。文さんは５千円を故郷に送金したといっていたが、台湾では２万４千円を故郷の銀行の自分の口座に送金できたのだ。当時の台湾の物価からすると、大変巨額の送金だった。

つまり、慰安婦は身分として売買対象となり、賃金をもらえずに働かされる奴隷ではなかったということだ。仮に借金の結果、こうしたところで働かざるを得なかったとしても、待遇は恵まれており、かなりのお金が稼げたケースもあり、それが朝鮮だけでなく台湾でも証明された。性奴隷ではなかったことを、証拠が示している。

ではなぜ、台湾の慰安婦はわざわざ預金通帳を大切に保管していて、博物館に寄贈したのか。彼女とすれば、せっかく稼いだこの大金を、戦後使えなくなったことが悔しかったのではあるまいか。

日本の敗戦後、台湾は国民党軍の統治下に入った。戦後の日本と同じように激しいインフレもあった。多額の日本円預金を持っているということが発覚すると、日本に協力したとして国民党軍から迫害される恐れもあった。今回の調査で出会ったある本省人のお父さんは、日本統治時代に商売に成功して多額の円を持っていたが、国民党軍にそれを知られると親日派だとして殺されるかもしれないと恐れて、持っていた円を川に流してしまった、そのことを亡くなるときまで悔しがっていた、と聞いた。この通帳の持ち主の元慰安婦も同じ気持ちから、通帳を大切に保管していたのではないか。

２．台南市の慰安婦像の問題点と設置に反対する台湾人の声

台南市を訪れ、慰安婦像を見た。台南は烏山頭ダム建設を指揮した日本人技師八田與一を顕彰するなど、反日とはほど遠い土地柄で、台湾でも最も親日的な地域と言う人もいる。ところが平成30年8月14日に同市の中心部の交差点に慰安婦像が建てられ、除幕式には馬英久前総統（国民党）らも出席した。

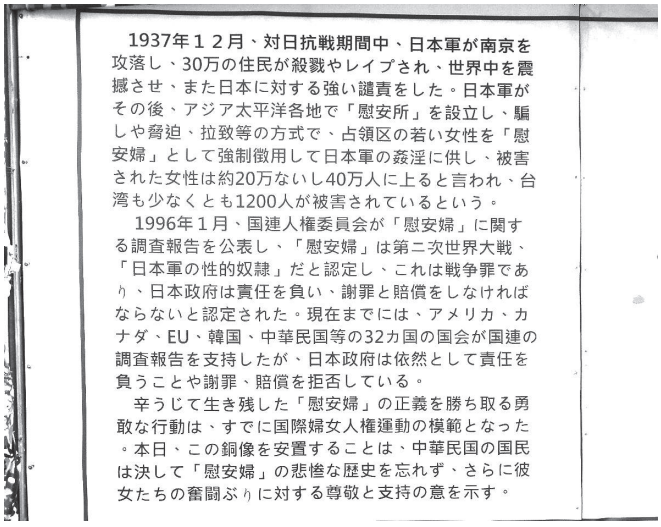
場所は国民党の所有地内で、隣のビルには「中国国民党台南市委員会」の看板が掲げられている。道路を隔てた向かいには、日本統治時代に建てられ、今も営業すると共に観光スポットでもある「林（はやし）百貨店」があり、それを睨むように野外の反日施設ができたというのは異様である。写真にあるのがそれで、韓国の慰安婦像とは少し異なっていて、手を挙げている。中国語だけでなく、英語、韓国語、日本語の解説文が、ものすごく大きく目立つ横断幕のようなパネルとともに、市の中心地に掲げられている。慰安婦像だけなら、なんの像か分からなくて通り過ぎる人も多いが、これほど大きいのはやはり問題だ。

現場を訪れて実感したが、韓国内や米国などにある各種慰安婦像と比べても、ひときわ問題が大きいと言えるものであった。

その理由は、像の背後に設けられた大きなパネルにある。台座にも歴史を歪曲した説明文が刻まれているが、読みにくい小さな字であり、敢えて目を通す人はごく一部だろう。像と台座だけなら、行き交う人の殆どは、両手を挙げたポーズを取る少女が「慰安婦」だという認識を持たないはずである。

ところが大きなパネルについては、否応なく目に入る。信号待ちの間に何気なく読んでしまう（少なくとも数行は）という人もかなりいるだろう。子供に「あれはどういうこと？」と聞かれて、答に困ったという親の声も聞いた。

パネルは中国語、英語、韓国語、日本語と４枚掲げられているが、日本語版の冒頭を掲げておくとこうなる。言葉遣いはかなり怪しい。



1937年１２月、対日抗戦期間中、日本軍が南京を攻落し、30万の住民が殺戮やレイプされ、世界中を震撼させ、また日本に対する強い譴責をした。日本軍がその後、アジア太平洋各地で「慰安所」を設立し、騙しや脅迫、拉致等の方式で、占領区の若い女性を「慰安婦」として強制徴用して日本軍の姦淫に供し、被害された女性は約20万ないし40万人に上ると言われ、台湾も少なくとも1200人が被害されているという。

1996年１月、国連人権委員会が「慰安婦」に関する調査報告を公表し、「慰安婦」は第二次世界大戦、「日本軍の性的奴隷」だと認定し、これは戦争罪であり、日本政府は責任を負い、謝罪と賠償をしなければならないと認定された。現在までには、アメリカ、カナダ、EU、韓国、中華民国等の32カ国の国会が国連の調査報告を支持したが、日本政府は依然として責任を負うことや謝罪、賠償を拒否している。

辛うじて生き残した「慰安婦」の正義を勝ち取る勇敢な行動は、すでに国際婦女人権運動の模範となった。本日、この銅像を安置することは、中華民国の国民は決して「慰安婦」の悲惨な歴史を忘れず、さらに彼女たちの奮闘ぶりに対する尊敬と支持の意を示す。

「1937年12月、対日抗戦期間中、日本軍が南京を攻落し、30万の住民が殺戮やレイプされ、世界中を震撼させ、また日本に対する強い譴責をした。日本軍がその後、アジア太平洋各地で「慰安所」を設立し、騙しや脅迫、拉致等の方式で、占領区の若い女性を「慰安婦」として強制徴用して日本軍の姦淫に供し、被害された女性は約20万ないし40万人に上ると言われ、台湾も少なくとも1200人が被害されているという。

1996年1月、国連人権委員会が「慰安婦」に関する調査報告を公表し、「慰安婦」は第二次世界大戦、「日本軍の性的奴隷」だと認定し、これは戦争罪であり、日本政府は責任を負い、謝罪と賠償をしなければならないと認定された。……」

こういういい加減な話が明記されている。40万という数字が注目される。これは、中国における慰安婦研究の中心人物、上海師範大学の蘇智良教授の説と軌を一にするもの

だ。蘇氏の言説がいかにいい加減かということについては、歴認研の前身である中国人慰安婦問題研究会の報告書『中国人慰安婦に関する基礎研究』（『歴史認識問題研究』別冊として日英両国語で発刊）で、私たちは彼の主張は完全に破綻したものと考えているが、このようにその悪影響が広がっていた。

現地の民進党関係者の話では、令和2年1月の総統選に民進党の候補として名乗りを上げていた頼清徳前行政院長（首相に相当。元台南市長）が極めて親日的であるため、頼清徳の地元で日本との関係をぎくしゃくさせ、政治的に揺さぶる狙いがあったのではないか、とのことだった。今のところ、韓国の反日団体が大挙訪れ、大々的パフォーマンスを行うといったことはないらしい。

慰安婦像と並び、もう一つ懸念すべき動きがあった。ナチスの犠牲となったアンネ・フランクと台湾人慰安婦の同質性を強調する、展覧会の開催である。首都台北（会場は「アマの家」という慰安婦記念館。アマはおばあさんの意）に続き、台南でも国立台湾文学館で開催する旨の予告の看板が、同文学館前の人通りの多い場所に掲げられていた。（4月11日から8月18日まで約４ヶ月間。）

言うまでもなく、一民族の絶滅を図ったホロコーストは余りに明らかな「人道に対する罪」であり、日本軍が民間業者に運営を許した慰安所とは全く性質が異なる。

これまで韓国の反日団体が、元慰安婦とホロコーストの生き残りの老婦人をメディアの前で会わせるといったパフォーマンスを、米国の首都ワシントンなどで行ってきた。そうした輪の中に、台湾も巻き込もうという動きと言える。

それにしても、会場が基本的に親日国である台湾の国立施設というのは由々しき事態であり、日本政府はしっかり史実を発信し、対抗していかねばならない。

特に今後、親中的な国民党政権が発足した場合には、慰安婦問題をめぐる状況は一気に悪化する可能性がある。

日本大使館に相当する日本台湾交流協会が、像の設置翌日の平成30年8月15日に、「国民党台南市党部関係者らが、数多くの日本人観光客が訪れる台南市の目抜き通りに慰安婦像を設置したことは、我が国政府の立場やこれまでの取組と相容れないものであり、当協会として大変残念に思っております」とする声明文を出した。しかし、さらに踏み込ん

だ対応が必要だろう。

慰安婦像に対しては、台湾の知識人から厳しい批判が出ていた。台南の慰安婦像設置直後の平成30年8月21日に、元対日文化経済協会総長の黄天麟氏が『自由時報』のコラムでこの慰安婦像建立を批判し、「国民党は『軍中楽園の少女像』を建立せよ」と述べていた。

軍中楽園というのは、国民党軍に付随した慰安婦のような存在だ。以下、その部分の翻訳を紹介する。全文は、後掲の〈資料〉を参照されたい。

〈慰安婦とは、人類の歴史上の傷口である。日本は決して謝罪していないわけではない。 宮沢喜一元首相、河野洋平元内閣官房長官、橋本龍太郎元首相、小泉純一郎元首相と、並みいる政府首脳が謝罪をしてきている。では、戦後台湾に存在した「軍中楽園（慰安所の通称）」については誰も何も声を上げていないではないか。筆者も戦後、兵役を経験している。兵隊たちが喜び勇んで「軍中楽園」へ遊びに行くのについて行ったこともある。「軍中楽園」では、どこから連れてこられたのか分からないような少女たちが、こんなはずはなかったというような表情で臭い小部屋のなかに住まわされていた。ところが、現在にいたるまで、国民党あるいは関係者から、この少女たち（主には原住民の少女）に対して謝罪したということは寡聞にして知らない。もちろん、相応の補償がなされたという話もない。

国民党台南支部に対して言いたい。もし本当に、こうした歴史上、被害を受けた女性たちを救済することに関心を持つのであれば、慰安婦像の隣に同じ大きさで『軍中楽園の少女像』を建てるべきだ。そうすることで、台湾に敗走してきた国民党が行った非人道的な政策に対する謝罪を表明することになり、台湾を植民地同様に蹂躙してきた負のシンボルにもなるだろう。それが出来ないのであれば、さっさと慰安婦像を撤去するべきである。〉

堂々たる反論が、日本人向けでなく台湾の新聞に出ている。

だから台南の慰安婦像は国民党対民進党の戦い、政争の中で建てられたもので、台湾でも激しい論争が展開されていることを知っておいたほうがいい。単純に台湾が反日に変わりつつある、などという話ではないと分かった。

台南に出掛けて行った日本人が慰安婦像を蹴ったとする映像が流れ、批判を浴びた。実際に蹴った、蹴っていないという論争もあるようだが、もう20年以上、この問題に取り組んできた私たちが痛感するのは、はじめの頃日本でも、現在の歴認研のような見方はごくごく少数派だったということだ。今、日本では、特にネットでは「慰安婦は性奴隷じゃない！」と言っても誰からも叩かれない。日本の言論空間は確かに少し変わった。だが、海外でも同じような言論空間があるかと言えば、決してそんなことはない。

権力による強制連行、性奴隷が資料的に実証されないという認識は、日本国内では共通理解となった。しかし、それはあくまで国内での話だ。国際世論はどう見ているか。我々がこれまで英語で国際発信してこなかったこともあって、海外では別の目で見ている。そのギャップをどう埋めるか。国内では決着がついている議論だが、世界から見ると決着がついていないどころか、誤解は深まっている。

もちろん外務省が英語で今まで発信してこなかった問題はあるが、私たちはもっと、自分達の行動がどう世界に映っているかということに敏感になり、適確に対処しなければならない。反射的な行動や感情に流された行動で誤解をもたらすようなことは、厳に慎むべきだ。

まだ国際社会では我々は少数派であり、いかにして多数派をつくって世界の常識にするか、という意識を持たなくてはいけない。

３．ユネスコ慰安婦登録資料について

阿嬤の家を運営しているのは婦女救援基金会、韓国で言うと挺対協のような民間団体だ。ユネスコの「世界の記憶」遺産に登録申請した資料もここに含まれている。９カ国が申請した世界の記憶の資料は全部で2744件あるのだが、このうち台湾から申請されたのは271点、約10分の１が台湾からの申請だ。その中身は、①日本軍の慰安婦制度に関する資料が63点、②慰安婦に関する資料が127点、③慰安婦問題解決のための活動資料が81点、となっていた。元慰安婦の証言録は②に含まれており、19点を数える。

そのなかに、元慰安婦が書いた絵が含まれていた。韓国からも同様の絵が申請されており、昭和天皇を木に縛り付けて３丁の拳銃で狙いをつけたような激しい絵が目立ったが、その手の激しい絵は、台湾人慰安婦の絵からは見つからなかった。抽象画のようなものが多い。精神療法のために描いて、心理分析してアドバイスするための抽象画のようだ。よく意味が分からない。世界の記憶にそもそも値するものなのか、と首を傾げてしまうようなものだ。

同じく、ユネスコ慰安婦登録資料として台湾から出された元慰安婦の証言録19点のうち、８人分の証言録も入手できた。主なところだけを紹介したい。

劉黄阿桃「南洋で看護婦の仕事があるという張り紙を見た友人が一緒に応募しないかと誘ってきました」「日本人の一組の男女が私たちを高雄から船でインドネシアへ連れていきました」「現地に着いて初めて慰安婦になるのを知り、怒りがこみ上げてきて、私たちを連れてきた日本人に不満を言いましたが、帰ることもできず、日本人は国のために軍をねぎらうという大義名分で私たちに軍人の相手をさせました」。

応募しているわけで、権力による強制連行とはいえない。

客家　蘇寅嬌「海南島の食堂で給仕を募集していると妹から聞き、妹と一緒に海南島へ行くことにしました。何もない島に到着したときに、だまされたこと、日本軍の慰安婦にさせられることを知りました」

募集に応じたもので、権力による強制連行とはいえない。

同　呉秀妹「1940年。私はだまされて日本軍の慰安婦にさせられました。毎日20人から30人の兵士に犯され、つらくて死にたい思いでした」

だまされたとあるが、問題は誰がだましたのか、という点だ。そこが明らかではない。
その他の証言録を抜粋すると、以下の通りである。

鄭陳桃「1942年6月4日、中学校へ行く途中、ジープを運転する渡辺という日本の警察官が通りかかり、車に乗るように言われました。・・・着いたのは高雄港で、そのまま船に乗せられ、インドのアダマン島へ連れていかれました」
客家　盧満妹「17歳の時、海南島の食堂が給仕を求めているという話を耳にします。・・・海南島へ連れていかれました」
原住民　林沈中「1942年12月、私が17歳だった時、日本人の警察官から、村の女性数人と一緒に、村の近くにある部隊へ行って、兵士たちの衣服の繕いや炊事、掃除などをするように命じられました。1ヶ月ほどすると、私たちを管理していたNartiaという人から『明日から夜もここに残り、今後は部隊内に寝泊りしろ』と言われました」
同　蔡芳美「こうして強姦され、その日から毎晩、軍人たちに入れ代わり立ち代わり暴行されることとなり、・・・日本軍の兵営で、昼間は兵士のために洗濯や炊事をし、夜になると彼らの性奴隷とされたのです」
同　李温紅柿「家が貧しいのを見て、その警察官は香港の日本軍部隊の仕事をしないかと聞いてきました。それが慰安婦になることだなどとは思いもしませんでした。・・・一日13時間、毎日少なくとも５人以上の相手をしなければならず、給料も休日もありませんでした」

中央大学の名誉教授、吉見義明氏は慰安婦には４つの自由がなく、だから性奴隷なのだと定義して主張している。４つの自由とは居住の自由、外出の自由、廃業の自由、接客拒否の自由だ。ところが阿嬤の家にフィリピンの慰安所規定（昭和17年11月22日付）が展示されていて、それによれば慰安婦は毎日朝の８時から10時まで自由に散歩できたとある。吉見氏の定義に照らせば、少なくとも外出の自由はあったことになる。
実は阿嬤の家がまとめた非売品の書籍には、吉見氏がその序文を書いている。韓国のナヌムの家でも、吉見氏をはじめ日本の研究者や活動家たちが提供した写真が多く確認されたが、台湾の慰安婦問題でも吉見氏が古くから関与していたことが分かった。